『何も思いつきません。』

真っ白な原稿用紙の一番端、弱弱しい字でその一文だけが書かれていた。

2ページ、3ページと後に続く束ねられた数十枚の原稿用紙は真っ白。白い用紙をめくり続けて20ページを超えた頃、白に映える赤色を見つけて喜びかけたものの、何らかの液体で汚れた、ただのシミだった。…おい、赤ってなんだよ。何のシミだよ、これ。

とにかく、最初の文と変なシミ以外には特筆する点もない白紙の原稿用紙の束が手元に届いた今、私を待っているのは地獄のような日々であることが確定した。この原稿用紙を送ってきた新人と、他でもない私のせいで。

絶望的な状況、私の口から出たのは。

「………終わった。」

たった一言、自分の声とは思えないほど掠れた声だった。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――

社長って楽そうだよね。そんな甘い考えから私の社長人生は始まった。

社会人としての適当な肩書とそれなりの地位が欲しかったからという、正常な人であれば呆れて冗談と思うレベルの理由でも、意外とお金さえあれば会社は簡単に建ってしまうものだった。成人したその日の内に、私は小さな出版社を建てた。

出版社にした理由は、昔読んだ雑誌が面白かったから。ただそれだけ。

建ててしまえば後は楽で、仕事を部下に任せて、自分は悠々自適に過ごせる。本気でそう考えていた。

…結果、設立半年後。会社は今にも倒産しそうになっていた。当然である。

そもそも、私は学生時代バイトも部活もしなかった社会経験ほぼゼロの人間で、常に孤高の人として生きてきた。会社としての業務を成り立たせるコミュニティもノウハウも何一つとして持っていない。普通は予測が着くはずのこの有様にも気付かない程、一般常識というものが欠如していた。

社員なんてとっくの昔にみんな逃げて、今や3階建ての新築事務所に無力な社長がポツンと取り残されている状況。

あまりに惨めで、空しくて、大体一か月ほど前に、私は思わずネットの掲示板で呟いていた。

" 1: nanashi\_noGONBE　：2030/09/15(月) 10:34:31.11 ID:c4Zss//\*ai

　　【助けて】会社建てたけど社員みんな逃げて倒産しそう。誰か助けて"

" 2: nanashi\_noGONBE　：2030/09/15(月) 16:22:19.04 ID:K0()OHshs

　　 私フリーのライターです"

これが件の新人との出会いであった。

なんやかんやでこの掲示板から話が進み、ライターを名乗る新人に一縷の望みをかけて、何か記事を一つ書くように頼んだのだが、届いたのは白紙の原稿用紙。

…今にも意識が飛びそうなほどショックだが、現状頼れるのはこの新人だけ。こうなったら記事を書いてもらえるまで一生追い回してやる。

一応、正式な仕事の依頼ということで、相手の連絡先や住所は控えていた。偽の情報である可能性も否めないが、ここから距離的にも近いため、とりあえず行ってみることにした。

～～～～以下岩下～～～～～～

「ここか…」

翌日、私はとあるマンションの一室の前に立っていた。

普通の社長なら忙しくて時間をつくるのも大変だろうが、倒産寸前の会社の社長じゃ時間など有り余っている。

このまま突っ立っていても何も始まらないのでとりあえずインターホンを押してみた。

ピンポーンと音が鳴り響くも、返事はない。その後も繰り返し押してみたがやはり返事はない。

居留守を決め込んでいるのか…と思い、ダメもとで私はドアノブに手をかけた。

すると、カチャッ…という音が鳴り響いた。

「っ………」

鍵が開いていた。

開いてしまった。開くはずのないものが開いてしまった。

何か事件があったのではないかという焦燥とこのまま乗り込んでやる！という気持ちが心の中で渦を巻く。

少しの葛藤の末、私はおそるおそる新人宅の中へ足を踏み入れた。

「おじゃましまーす」

と小声で呟きながらそろそろと足を踏み出すと、全体的に整ったこぎれいな部屋が視界を埋めた。

いろいろと物色してみたが人の気配はない。新人が書いたであろう記事や資料が多く見つかったことが私の疑問を大きくする。

「なぜ白紙を送ってきたのだろう…」

だが、一つの扉が目に留まった。目には見えない何かが私をそこに引き付けているようだった。私はその扉を開けた。

そう…開けてしまったのだ。

そこで目にしたのは、

椅子に座ったまま動かない血まみれの女性と、彼女の前にあるディスプレイに映し出された「住所」と「X」の文字だった。

いよいよ本格的にまずくなってきたかもしれない…。

～～以下堀越～～

「…えっ？」

自分でもびっくりするくらい間抜けな声が出た。

目の前で起こっていることを理解するのに、少し時間がかかってしまった。

目の前の女性の出血量はそこまで多くない。

とにかく救急車、と思い、慌てて連絡を入れる。

──と、その前に。

ディスプレイに「ｻﾞｻﾞｯ…」とノイズが入った。

「────」

怖すぎる。最早この状況自体意味不明なのに、さらに目の前で意味不明なことが起きている。

…誰かに遠隔操作されているのだろうか。

数秒でノイズが止まり、なにかが聞こえてきた。

「……は………て、……」

どうやら私の推測は正しかったらしい。

目の前の状況にも慣れたのか、落ち着きが戻ってきた。

今起こっている状況に、冷静に向き合えるようになってきた。

──いや、或いは。

目の前の状況をこの目で見てしまったせいで、「ある違和感」に気づかなかっただけなのかもしれない。

「……お待ちしておりました、社長さん」

当たり前だが、聞こえてきた声は機械音声だった。

男か女かも判別がつかない、くぐもった声。

「…誰ですか、貴方」

私は警戒心を隠すことも無く、声を発した。

「彼女は、ちょっとしたサプライズです。このくらいしないと、社長さんも真剣になってくれないでしょう？

…ああ、警察などにはくれぐれも連絡をしないように。連絡をしたのなら……、そうですねえ…」

どうやらこちらの声は聞こえていないらしい。

しかし近くにはマイクがあるし、ディスプレイの上部にはカメラも搭載されている。

もしかしたら、聞こえていて無視しているだけかもしれない。

「…人をサプライズ呼ばわりですか」

ダメもとでもう一度声を出してみる。

「あなたには今から、ワタシの指示する場所へ向かってもらいます。最初に向かってもらうのは……、このディスプレイに写し出されている場所です。

……それでは、お待ちしております、社長さん」

やはり聞こえていないのか、無視しているのか。

ディスプレイに写し出された「X」の文字が憎たらしく感じた。

その後、写し出されていた住所のメモを取り、すぐに向かうことにした。

部屋を出る直前、彼女に向けて手を合わせる。

──結局、最後までこの部屋の「違和感」に気づくことはなかった。

～～以下宮下～～

彼女が出ていった後の部屋は、不気味なくらい静まり返っていた。椅子に腰をかけて物言わぬ骸になってしまった女と、黒く染まったディスプレイだけがある部屋。

『社長、社長、お願い、行かないで！　あいつは社長が狙いなんです！』

誰もいなかったはずの部屋で、物言わぬ骸になったはずの女が嘆き叫ぶ。女は、他でもない社長の下で働いていた社員だった。実は社員の全員が社長が人間関係が苦手なことに気づいて、陰でサポートをしていた。社長はコミュニティやノウハウがなかったが、そんなものは社員でどうにでもなる。社長に人生をあきらめていたところ拾われたので恩義を感じていたし、なんだかんだいって仕事に誠実な姿勢をとる社長は他社からの評判もよかった。小さいながらもみんなで頑張っていた。そのはずだったのに、たった一人によってここまで壊されてしまった。

ある日、社長が一人の新入社員を連れてきた。

『望月晴です。よろしくおながいします。』

新人の子はそう名乗った。見た目が中性的でわかりにくかったが、どうやら女の子らしい。ともあれみんな彼女を歓迎した。どんな事情があろうとも、社長に拾われたからには家族になったも同然なのだ。しかし、日が経つにつれて、晴ちゃんの様子がおかしいことにみんな気づいていった。「社長と話しているときにやたらみられる」「社長との距離がおかしい」etc.etc……もしかして晴ちゃんは社長が好きなのでは……？　そう気づいた時には、「青春やん」「我らが社長受けぷまい」「百合最高すぎだろ」などなど、それはそれはいろんな意見（癖が強いしピー音が必要なレベルもあった）があったが肯定的なものばかりだった。

見守ろう、そう決めて幾許かたった頃、気づいたら晴ちゃんの態度が悪化していた。社長以外全員邪魔だ、とでもいうかの如く手を替え品を替え、社員を退職に追い詰めていった。ある者は実家の家族が小さな事故に遭い（怪我はなかったがギックリ腰になった）、ある者は大企業からの引き抜きに、偶然にしては重なりすぎていて、調べれば調べるほど晴ちゃんの影が見えてくる。何か手は打てないか、そう悩んでいたときに晴ちゃんに声をかけられた。

『先輩、相談に乗っていただけませんか』

絶好の機会を逃すはずもなく、誘いに乗ることにした。

『いいよ、今夜ご飯行こうか』

次のターゲットが自分なのか、探りを入れたから邪魔になったのかはわからない。でも、今夜仕掛けられる、そう謎の確信があった。

『それで、どうしたの？』

当たり障りのない会話から始まったそれは、ごく普通の内容だった。

『あぁ、でも残念です。先輩がそんなに察しがよくなければこんなことせずに済んだのに』

『なにを、言って』

『お酒に強い先輩が大して呑んでないのに眠気がするだなんて、おかしいでしょう？』

『なるほどね、盛られたか』

『察しのいい先輩は好きですよー今回はそのせいですけどね』

『……なにをするつもりなの？』

『ふふ、ヒミツです』

『……そう』

『なんて、もう先輩で最後ですから教えてあげます。先輩たちの身体を使ってゲームをするんです。ちゃーんと痛くないように殺りますから』

『さいっあく』

『寝ている間にぜーんぶおわりますから、安心して眠ってくださいね』

『こんなので人生終わりとか、さいあくだよ』

『最後に遺すのがそれでいいんですかー』

『そうね……晴ちゃんの計画は失敗するわ、絶対に。すべて晴ちゃんに返ってくる、せいぜい震えて待ってなさい』

それを最後に、意識が落ちる。あぁ、どうか社長が無事でありますようにと、それだけが気がかりだった。

『だから先輩を最後にしたんですよ。でも、腹が立ちますから最初の人形は先輩にしますね』

そういって晴は先輩の身体をいじり出した。毒をまわし、息の根をとめる。丁寧に丁寧に処理を施す。腐らないように、異臭を放たないように、そのままの形を時が来るまで保てるように。全ては晴を救ってくれた愛しい愛しい神様を、社長を、自分のものにするために。丁寧に、丁寧に時間をかけて処理をして、完璧に人形に仕立て上げる。そうしてできた人形は作られたスペースに収められた。一ミリの誤差もなく等間隔に並べられた、真白に染まった棺に入れられる。全部、晴の先輩たちだったものなのにもう何を語ることもない。ほかでもない晴によって、人形に仕立てられその生の幕を閉じた。作りあげた人形を、社長に指定した場所に置く。まるでそこで殺されたかのように仕立て上げ、追い詰めて、手にいれる。

『あぁ、私の神様、私だけの愛しい社長。はやく、はやく私に気づいてくださいね』

〜〜以下倉林〜〜

ディスプレイに映し出されていた住所はかなり離れていて1日では辿り着かなかった。なんとか激安の宿を見つけ泊まろうとした時、スマホが鳴った。一番最近いなくなった社員からのラインだ。スマホが古すぎるせいで暫く前の連絡の通知なのに今来たらしい。彼女は次々にいなくなる社員を止められない俺に愛想が尽きたのかと思っていたが、一体何の用だろうかとアプリを開くと、怪文章が記されていた。

『 か で、 いつ ちょ を って 。 んは な んぎ うに、 た。 げて。 や ！』

…どうしたんだこの人？正直嫌な予感だけはひしひしと感じられるが、自分を見限った奴の言いなりになりたくないという社長とは思えない器の小ささで無視してしまった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『もうすぐ、もうすぐ。やっと、ゲームを始められる…！

社長、どんな反応するのかなぁ。楽しみ！早く、早く、早く、私を！私を、見て』

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

うごっ…けたぁ！最後だからって油断したわねあの性悪女、ざまぁみろ。って言っても、スマホは没収されたし、なんなら動くの上半身だけで棺からでることすらできない。消え際に送った言葉は社長に届いたかな。どうか無事でいて。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そして朝になり、目的の場所に再び向かい、昼頃にようやく着いた。少し古そうな木造の二階建て一軒家だ。勇気を出して中に足を踏み入れる。中には何も無く、二階の一部屋に紙が1枚ぽつんと置いてあるだけ。

『あなたの心を試します。全部で3回、全て終えた先に私はいます。あなたに会えるのを楽しみにしています。』

気づくと、火が燃える音が聞こえる。少し煙臭い。状況が整理できない。どこからか声がした気がする。

❝2階に人形を設置し、家に火を付けた。健闘を祈る❞

状況が整理できないまま、第一の試験が始まる。

～～🦑飯島～～

//一抜けします。がんば。整理だけしました。あとの人が矛盾しないような助けになったらいいなと思います。

=====================================================

<補足・伝言>

私…今にも倒産しそうな会社の社長

新人…フリーライター、私と地元が同じ

謎の人物X…「私」をある場所へと誘導する

会社設立→倒産の危機→新人と出会う→新人に仕事を依頼→白紙の原稿用紙が届く→私が新人の家に行く→指定された場所へ向かう

続きは頼みます。by岩下

「違和感」についてのヒント（？）

描写されていたのは、視覚、聴覚からの情報のみ。

単純に「私」が風邪気味で鼻が詰まっていた可能性や、描写忘れもあり得るが…。

匂いを感じない「血」は本当に血だったのか？

赤い液体を血とするか別の液体にするかは任せます。By堀越

望月晴…社長にエグい執着を抱いている、Xの正体でもいいし、利用されている、利用しているでも可

椅子に座って血を流していた女…元部下、最後に殺されて最初に使われた

とりあえずやったしなんとなくやべえやつ感出した。描写はマイルドなはず。

百合オチでも映画やドラマでしたでもなんでも可。

移動する先々で社員の死体出してくれたら私が嬉しい。

文が長くなりすぎるのであとは任せます　by宮下

最後に人形にされた女も実は社長が好きなのでは？と勝手に考え復活させました。この後生かすも殺すも任せます。健闘を祈る。By倉林

整理します。

はんな：[私、新人ライター]

この時点ではどちらも性別はわからない

岩下：[謎の人物X、血まみれ女性]

堀越：

宮下：[望月晴、先輩]

>彼女が出ていった後の部屋

>百合

社長女

倉林：

俺

社長男化

>『社長、社長、お願い、行かないで！　あいつは社長が狙いなんです！』

誰もいなかったはずの部屋で、物言わぬ骸になったはずの女が嘆き叫ぶ。

→血みどろ女性 = 先輩

>うごっ…けたぁ！最後だからって油断したわねあの性悪女、ざまぁみろ。って言っても、スマホは没収されたし、なんなら動くの上半身だけで棺からでることすらできない。消え際に送った言葉は社長に届いたかな。どうか無事でいて。

しかし別に血みどろ女性は棺に入ってない

→血みどろ女性 ≠ 先輩

→最後の社員＝棺に入った女性＝晴の先輩

矛盾

> 小さいながらもみんなで頑張っていた。そのはずだったのに、たった一人によってここまで壊されてしまった。

晴はたくさん社員がいた時代に入ったことになっている。

晴≠フリーのライター

>一番最近いなくなった社員(=先輩のこと？)

>ある者は大企業からの引き抜きに、偶然にしては重なりすぎていて、調べれば調べるほど晴ちゃんの影が見えてくる。何か手は打てないか、そう悩んでいたときに晴ちゃんに声をかけられた。

『先輩、相談に乗っていただけませんか』

>社員なんてとっくの昔にみんな逃げて、今や3階建ての新築事務所に無力な社長がポツンと取り残されている状況。

>大体一か月ほど前に、私は思わずネットの掲示板で呟いていた。

誰もいなくなってからフリーのライターを雇っている。

晴、先輩は一ヶ月以上前に会社をやめている。

最近いなくなった社員が晴でない理由。社員が一人になっているんだから、ライターだろう。ライターを除外して考えて、一ヶ月前の社員たちの中でとしても、晴と先輩は最低でも同時に抜けるべき。職員時代に飲み会に行っているため。

>一番最近いなくなった社員からのラインだ。スマホが古すぎるせいで暫く前の連絡の通知なのに今来たらしい。彼女は次々にいなくなる社員を止められない俺に愛想を

主人公男化

これからまとめなければいけないこと

1.晴が辞めた理由

2.晴が一ヶ月以上待った理由(最後に残った先輩をライター役にすればよかったくないか)

3.３つの試練

4.社長の性別の謎

5.ライターとは何者か

6.Xの正体

7.棺桶の謎

8.死体(人形)動いてる

9.てか人形ってなんやねん。2030年の概念？

10.原稿用紙の血

11.ライターの住所にXが血みどろ死体とモニターとかをセットできた理由。ライターどこ

12.望月が人形を作る理由

13.人形にしたのと、普通に辞めさせた社員の違い

14.部屋の違和感

憶測結論

1.犯行準備

4.執筆者ミス

10.晴が社長を呼び出すために

12.3つの試練につかうため。でも普通にひっこぬい

13.血に匂いがない理由。人形だから。人形ってなんやねん

パスします。

By 飯島